

## 成人看護学領域における看護技術教育の検討 —過去10年間の成人看護学演習の動向から—

林美奈子 竹内久美子 伊藤ももこ 石光美美子 口元志帆子  
(Minako HAYASHI Kumiko TAKEUCHI Momoko ITO  
Fumiko ISHIMITSU Shihoko KUCHIMOTO)

### 【要約】

成人看護学における看護技術教育の方法・内容と成果を明らかにし、本学成人看護学における看護技術教育の内容・方法への導入を検討することを目的に、研究論文のレビューと分析を行った。キーワードを「技術教育」、「演習」、「学内実習」、「成人看護」とし、53文献を検討した。

その結果、1) 演習内容は、看護過程を用いた演習13件であり、その多くは実技演習を組み合わせている。実技のみを行う演習では、看護過程併用に比べて実施する実技項目が多かった。2) 学生による自己評価のみで演習の目標を評価している文献が多く、測定用具を用いているものもあったが、総数は少ないことが明らかとなった。

看護技術教育については、本看護学部全体で卒業時の到達内容を検討する必要がある、看護過程を併用した実技演習と紙上事例での実技演習とを、実習環境等を考慮して適応させる必要がある。看護技術教育の方法の妥当性を評価するには、学生と教員がともに技術の評価を行う必要があると考えられた。

キーワード：成人看護、技術教育、演習、実技演習、演習評価

### はじめに

看護系大学の現状として、1992年以降毎年新設されているという状況がある。さらに社会的背景として医療の高度化、患者の高齢化・重症化・在宅への移行、在院日数短縮等の状況から、看護学の学士教育のあり方の検討も盛んになってきた。学士教育を看護学の学問追及に偏ることなく、学問に裏付けられた看護実践を行うことのできる人材を育成するところであるとき、看護学の学士教育の意味するところは変化してきているのではないだろうか。日本看護系大学協議会の「看護系大学の学内演習・臨地実習に関する調査」報告書<sup>1)</sup>によると、看護学士課程教育において看護実践に必要な知識・技術を臨床実習で習得させることは困難であり、個別性を尊重し創意工夫を要する看護行為は卒業研修における習得に譲るとしながらも、看護

技術項目の多くは学内演習を充実させれば可能と提言している。さらに、文部科学省の看護学教育の在り方に関する検討会の「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告<sup>2)</sup>がなされ、卒業後の成長を保証するために、卒業時の到達目標が設定された。そこで看護技術は、学士課程において修得しなければならない基本的な看護実践能力であり、卒業者がその後自ら研鑽することで初めて意味をなすものと示された。また、日本看護系大学協議会の「看護職の教育に関する声明」<sup>3)</sup>では、大学教育と専門学校教育・短期大学教育は異なる特性をもつ専門学校教育と短期大学教育は、職業教育 (occupational education) としての特性をもち看護ケアが着実に実践できる人材を育成するとされた。すなわち、そのときその場で必要とされるケアを行うことのできる実践者の育成が目的と

はやしみなこ：看護学部看護学科  
たけうちくみこ：看護学部看護学科  
いとうももこ：看護学部看護学科  
いしみつふみこ：看護学部看護学科  
くちもとしほこ：看護学部看護学科

されている。一方大学教育は、専門職業教育 (professional education) としての特性をもち、看護学の学問追求をし、学問に裏付けられた看護実践を行う人材を育成するのが目的とされている。

しかし、看護職は他の専門職と同様に人間社会の要請の中で芽生え、その時代の中で変化しつつ発展を続けてきたものであり、必ずしも学問に裏付けられてきたとは限らない。「看護職の教育に関する声明」では、専門職はつねにその社会の文化や諸制度に承認されつつ発展する、との考えを示している。つまり、看護職のもつ専門的知識・技術はその社会、その時代によって変化するものと認識されていることになる。またその社会における責務は、国民の期待と信頼を背に、日々の実践に必要なわざを磨き、かつまた人々の保健医療・福祉サービスの改善に立ち向かい、より健康な社会をつくるべく常に努力を積み重ねることである、と述べられている<sup>3)</sup>。だが、現行の看護系大学の教育課程ではそのような社会的責務を果たすことのできる人材の育成は困難であるということが、検討会が相次いで設置されつぎつぎとその報告書が公表されているという事実からうかがい知る事ができる。今、大学の看護基礎教育の指定規則改正と教育課程の体系的な見直し<sup>4) 5)</sup>が急務であり、看護教育は激動のときを迎えている。開設2年目ではあるが、目白大学 (以下、本学) 看護学部 (以下、本学部) においても、指定規則改正を契機とした教育課程の体系的な見直しを念頭に置き検討してゆく必要があると考える。

そこで成人看護学領域においては、これまで検討されているわが国の成人看護学領域における看護技術教育の教育方法・内容とその成果を明らかにし、本学成人看護学領域における看護技術教育の教育内容・教育方法への導入を検討する資料を得たいと考えた。

## I. 研究方法

日本における成人看護学領域における看護技術教育に関する研究論文のレビューと分析を行う。

### 1 対象文献の抽出

データベースは、医学中央雑誌WebVer.4を使用し、過去10年間 (1997～2007年) について、キーワードとして「技術教育」「演習」「学内実習」いずれかを含みかつ「成人看護」を含む124文献を抽出した。そのうちの原著論文53件を分析対象とした。

過去10年間としたのは、看護教育の指定規則改正

が1996年 (平成8年) に交付されたこと、そして現在さらなる改正がなされようとしてきていることを考え、論文数に変化があると推測できたためである。特に看護学の学士教育において看護実践能力育成の充実が、検討されてきたのはこの10年以内のことであったためである。

## 2 文献の分析方法

データ化には、研究者間で検討・作成した分析フォームを用い、各研究の概要及び研究内容を整理した。その上で、成人看護学の看護技術の演習に関する教育方法、教育内容、教育成果に焦点化し、対象文献を精読した後、それぞれの論文内容を端的に表現する文に要約し、意味内容の類似性・相違性に基つき分類し分析した。

## II. 研究結果

### 1. 研究の動向

#### 1) 文献数の推移

文献検索の結果、124件の文献を抽出した。内訳は原著論文53件、総説37件、会議録他35件であり、過去10年間 (1997年～2007年) の文献数の推移を図1に示した。原著論文は、1997年～2000年にはみられなかった。文献数は、2002年以降急激に増え、その後も一定の文献数が報告されている (図1)。

#### 2) 研究対象の機関と対象学年

過去10年間 (1997年～2007年) の53件の原著論文を分析対象として、研究対象機関および対象学年についての詳細を図2に示した。研究対象とされた機関は、大学が27件と最も多く、ついで短期大学15件、専門学校6件、教育機関3件、病院などの実習施設2件であった。研究対象は、学生が最も多く48件 (90.6%) であり、その内訳は3年生22件、2年生17件、1年生3件、4年生2件であった。2年生と3年生で39件 (73.6%) であり、大半を占めていた (図2)。

### 2. 演習の構成および内容

#### 1) 演習の構成

分析対象53件の中で、演習が実施されていた文献は36件であった。演習の構成をその内容から、「看護過程 (紙上事例含む) のみ」「看護過程 (紙上事例含む) を用いた実技演習」「紙上事例を用いた実技演習」「実技演習」「その他の学内演習」「学外演習」の6つに分類した。演習の構成ごとの文献数を表1に示した。

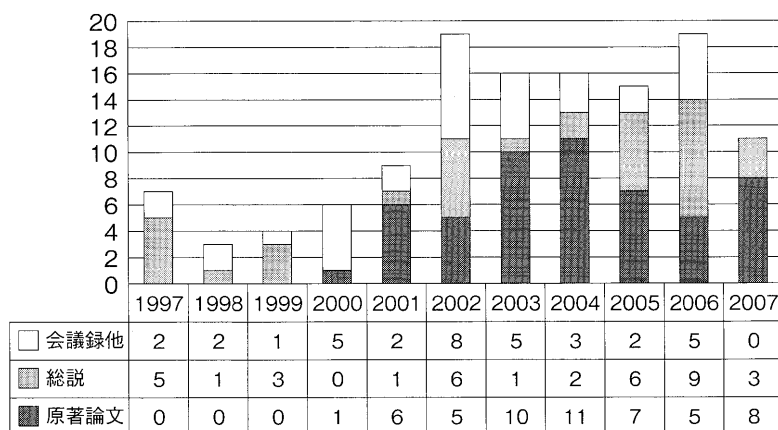


図1 過去10年間（1997年～2007年）の文献数の推移

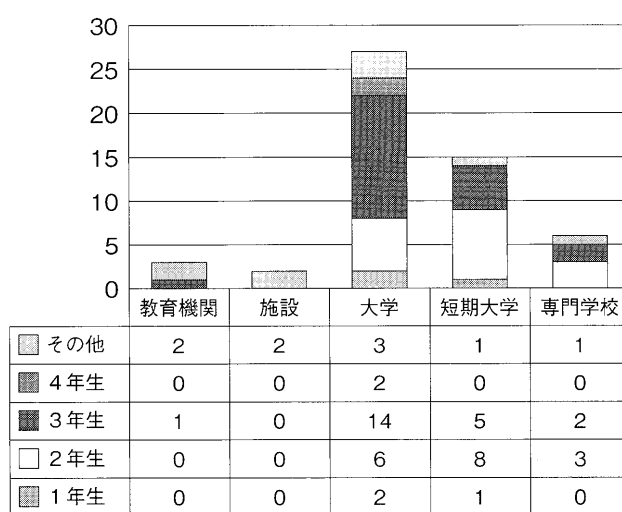


図2 過去10年間（1997年～2007年）の研究機関と対象学年

紙上事例を活用している演習は21件（58.3%）であり、紙上事例を提示し、看護過程を用いて演習を実施しているものは13件（36.1%）であった。また演習の中で、何らかの実技項目が含まれている演習は20件（55.6%）であった。さらに演習に看護過程および実技演習を含まない学内演習が5件、学外演習が5件含まれていた（表1）。

表1 演習の構成

演習の構成	件 (%)
看護過程（紙上事例含む）のみ	6 (16.7)
看護過程（紙上事例含む）を用いた実技演習	7 (19.4)
紙上事例を用いた実技演習	8 (22.2)
実技演習	5 (13.9)
その他の学内演習	5 (13.9)
学外演習	5 (13.9)

## 2) 演習の概要

演習を実施していた文献36件の演習の概要を表2に示した。紙上事例を用いた演習についての文献は36件中21件（58.3%）であった。このうち看護過程を用いて情報を整理・解釈している演習は13件（36.1%）であり、看護過程を用いず紙上事例を提示し、状況を考慮した実技を実施する演習は8件（22.2%）であった。紙上事例で活用されている疾患は、糖尿病が21件中7件と最も多く、病期での分類では周手術期に関する事例が7件であった。

実技項目数では、看護過程を用いてさらに実技を実施する演習では、実技項目が1～3項目に限定されていた。これに対し看護過程を用いずに提示された紙上事例の状況を考慮した実技の演習では、実技項目は1～8項目であり、事例の内容によっては看護過程を用いた演習より実技項目は多かった。実技演習のみを実

表2 演習の概要

演習の構成	文献番号	対象学年	事例内容	実技項目	その他の演習	授業回数
看護過程	2	2	不明			10
	20	3	慢性閉塞性肺疾患			4
	32	3	脳卒中急性期			6
	38	2	急性心筋梗塞			10
	41	2・3	詳細不明 1回目がん患者 2回目心筋梗塞、くも膜下出血、急性肝炎、慢性閉塞性肺疾患、糖尿病から一つ選択			不明
	45	3	がん患者 (乳がん、大腸がん、肺がん、胃がん、脳腫瘍のうちグループで一つ指定)			8
看護過程と実技演習	29	2	くも膜下出血			7
	39	3	肺がん	呼吸器ケア・呼吸音観察・呼吸訓練		2
	40	3	手術後	呼吸器ケア・呼吸音観察・呼吸訓練		4
	44	3	糖尿病、肺気腫、狭心症、卵巣がん、肺がん	清拭・洗髪・バイタルサイン		4
	46	3	糖尿病、肺気腫、急性心筋梗塞、急性肝炎、卵巣がん、			4
	47	2	糖尿病、インスリン自己注射導入	血糖測定・インスリン自己注射		8
	48	3	頸椎損傷術後	食事介助		3
紙上事例と実技演習	9	3	糖尿病	食事療法中の糖尿病患者の間食に出会ったときの対応		不明
	11	2	直腸がんストマ造設患者	ストマパウチ交換		不明
	19	2	膝関節症、胃がん、胸部大動脈瘤	点滴管理・気管内吸引・胃管挿入・ガーゼ交換・尿管挿入・移送・心電図・酸素飽和度測定		不明
	21	2	直腸がんストマ造設 術後9日目	ストマパウチ交換		3
	25	2	糖尿病	問診から診察までのロールプレイ		7
	26	2	高血圧・糖尿病既往のある左被殻出血	フィジカルアセスメント・心電図・点滴・血糖測定・インスリン自己注射・移動・排泄援助		5
	30	2	胃がん術後	術前訓練・術後の観察・酸素療法・輸液管理・創傷の観察とガーゼ交換・気管内吸引		8
	50	2	手術療法を受ける患者	術前訓練（複式呼吸・トリフロー）・喀痰喀出法・臥床含嗽・体位交換		不明
実技演習	5	3		AED		15
	6	2		寝衣交換・包帯交換の介助		2
	31	3		インスリン自己注射・血糖測定・運動療法体験		2
	34	3		ガウンテクニック		不明
	42	2		輸液ポンプ		2
その他の学内演習	3	2			デイベート	10
	12	3			説明活動（学生間の授業）	15
	13	3			説明活動（学生間の授業）	15
	37	3			グループ学習を用いたリフレクティブシンキング	不明
	43	3			コミュニケーション・トレーニング	不明
学外演習	4	1			CAI教材	不明
	14	1			健康教育	不明
	52	1			施設見学	不明
	53	2～4			施設見学	不明
	51					CAI教材

注) 授業時間は90分/回の表記となっている

施している演習は5件であり、具体的には実習室を使用し、手順や方法を体験することに演習のねらいが設定されていた。実習室を使用し、具体的な手技や方法を学ぶ演習では、演習を実施しその成果を直接評価している文献が3件、実習での経験と関連して検討している文献が2件であった。演習内容に共通性は見られなかった。

授業回数は、90分/回として換算すると、看護過程を用いた演習では2～10回、紙上事例のみを活用した実技演習では3～8回であり、看護過程の活用の有無による授業回数に違いは見られなかった。

そのほか実施されている演習を報告している文献は5件であり、ディベートや説明活動（学生間での授業の実施）などの高度なコミュニケーション・スキルの演習であった。また学内での演習だけではなく、成人看護学の科目の中で実施されている施設見学などを含む学外演習が3件、自己学習を主体とし自宅での学習が可能なCAI教材に関する文献が2件含まれていた（表2）。

### 3. 演習の評価方法

演習の評価方法について検討するために、対象文献53件のうち実際に行われた演習の成果について報告している論文を抽出した結果、26件が該当した。この26件を、表1で示した演習の構成「看護過程」「看護過程と実技演習」「紙上事例と実技演習」「実技演習」を参考に分類した。そして、演習の成果から考えられた教育目標について3領域別に分類し、演習内容別の教育目標及び評価者についての比較を行った。

表3に示したように、「看護過程」を行った5件では、3件が認知領域、2件が精神運動領域、1件が情意領域についての評価を行っており、1件のみが認知領域と精神運動領域の両方を評価していた。一方、看護過程の中に実技演習を組み込ませた「看護過程と実技演習」では、認知領域および情意領域の評価に比べ精神運動領域の評価は1件のみであった。また「紙上事例と実技演習」では、3領域個々の評価がほぼ同数行われていた。「実技演習」については、8件のうち3件が精神運動領域の評価を行っており、認知領域の評

表3 成人看護学演習の評価

演習内容	文献番号	年	認知領域	精神運動領域	情意領域	その他	評価者	
							教員	学生(自己)
看護過程 (5件)	2	2007	○					○
	20	2005	○	○			○	○
	32	2003		○				○
	38	2003	○					○
	45	2002			○			○
看護過程・ 実技演習 (7件)	29	2004	○				○	
	40	2003	○	○			○	○
	44	2003			○			○
	39	2003				○		○
	47	2002	○		○			○
	46	2001			○			○
48	2001	○				○		
紙上事例・ 実技演習(6件)	9	2006		○				○
	19	2005				○		○
	25	2005	○		○			○
	26	2004	○	○			○	○
	30	2004			○			○
	50	2001		○	○			○
実技演習(8件)	5	2007			○			○
	13	2006				○		○
	34	2004		○			○	○
	27	2003				○		○
	31	2003	○	○	○		○	○
	36	2003				○		○
	43	2003			○			○
	42	2002		○			○	

注) 教育評価のその他欄は、演習内容に関する感想などの記載があったものとした。また、網掛けの文献は、学生と教員の相互評価を行っている文献を示す。

価については1件、情意領域の評価では3件が行っていた。

また、教育目標の評価者について26件を概観すると、学生の自己評価のみの実施の18件が最も多く、3件が教員の評価のみの実施であり、5件が学生と教員の相互評価であった。学生と教員の相互評価を実施している5件の教育目標を見ると、5件全てが精神運動領域について評価しており、うち4件は認知領域についても評価していた。さらに、この5件では、精神運動領域の評価を学生と教員の相互で行うための測定用具を用いていた。具体的には、演習の行動目標に対応させた自己評価用紙、教員が期待する観察・援助項目、そして実施する技術のチェックリスト表であり、これらを独自に作成し使用していた(表3)。

### Ⅲ. 考察

本研究の結果、成人看護学領域の看護技術教育に関する研究の概要及び研究内容の現状が明らかになった。以下にそれらの特徴について考察し、本学における効果的な成人看護学領域としての看護技術教育の取り組み課題を検討する。

#### 1. 研究の動向

過去10年間(1997年～2007年)の124件の文献は、1997年～2000年に原著論文がみられておらず、2002年以降に文献数が増加している傾向を示した。これは、2001年に日本看護協会より「看護系大学の学内演習・臨地実習に関する調査」報告書<sup>1)</sup>が出され、その後学内演習の教育方法や内容について検討がなされたためと思われる。2002年以降も一定の文献数が報告されていることから、その後も看護基礎教育の中で学内演習への関心や期待が高いことがうかがえる結果であった。

成人看護学の演習においてその対象は、2～3年次の学生がもっとも多く、研究機関は大学・短期大学が大半を占めた。演習が実施される時期が2～3年次であるのは、1年次の基礎看護学の技術教育を基盤に、成人看護学における演習が設定されているためと考えられる。また演習でのねらいは、同時期あるいは演習での学習後に実施される臨地実習での学習の統合を目指して、実習前に行われていることがうかがえる結果であった。

#### 2. 演習の構成及び内容

演習の構成の特徴として、看護過程を用いての思考演習と看護技術を実施する行動演習(実技演習)の両方の習得を狙っていることが言える。アルファロは、看護過程とは人間的なケアを系統的・効果的・効率的に行う方法であると述べている<sup>6)</sup>。そして、看護過程は効果的な看護ケアを生み出すための原理、原則に基づいており、それを活用し問題解決や意思決定の能力を向上させ、看護ケアの機会や資源を最大限に活用することができる<sup>6)</sup>と説明している。成人看護学の看護技術教育として考えるとき、紙上事例(看護過程を用いるものを含む)を用いて実技演習をとるようになるのは必然といえるのではないだろうか。しかし、看護過程を用いての看護ケアの提供を学習する方法として、基本的な看護のプロセスを学習する基礎看護学ではなく、成人看護学であるからといって実技演習を取り込んだ看護過程演習という構築で全て行うのがよいかどうかは、十分検討する必要がある。その時に、看護学の学問追求をし、学問に裏付けられた看護実践を行う人材を育成のみならず、卒業すぐに看護実践ができる看護師の養成を要望する臨床の思惑をも視野に入れる必要があるのではないだろうか。

成人看護学の演習内容として、糖尿病や周手術期の事例を用いているものが多いのは、健康障害をきたしながらも生活者としての視点で、診療の補助業務に含まれる看護ケアを習得させたいという考えがあるからではないだろうか。

#### 3. 演習の評価

国内における成人看護学演習の教育評価を概観するために、抽出された論文の中から実際に行われた成人看護学演習について、内容別の教育目標と評価者について検討したい。今回抽出された文献26件について、「看護過程演習」「看護過程演習と実技演習」などの内容別に分類し教育評価の比較を行ったが、演習内容に関わらず、認知領域や情意領域について評価している文献が多かった。特に、「看護過程演習」の5件を除く21件の技術演習を含んだ文献においても、精神運動領域の評価を行った文献は9件と少なかった。これは、本研究が成人看護学における演習という点に絞った上での検討結果であることは否めないが、現状として、成人看護学における技術演習の教育効果について報告した知見が少ないことを示唆するものであろう。

また、教育評価の実施では、学生の自己評価で行っている報告が多くみられた。これは、今回抽出した多くの文献が、認知領域や情意領域から成果を捉えていたことと関連している可能性がある。つまり、学生にとって学習の進歩に関するフィードバックの提供であり、学生自身が学習を補完する必要がある部分をアセスメントできるようにすることを目的とした形成的評価をしていることになる<sup>7)</sup>。一方、学生の自己評価と教員の評価をともに行っている文献は5件あり、すべてが精神運動領域を評価していた。また、これらの文献では技術評価に必要な測定用具を作成し用いていたことから、学生が技術を習得する過程において、学生と学生以外の他者（教員、臨床指導者など）が共に活用できる技術評価の測定用具が必要であると思われる。学生と教員がともに評価をするということは、形成的評価の目的に加えて、技術演習の結果、学生がどれだけの技術能力を保持しているか確認することを目的とした確認的評価を行っていることになる。確認的評価を行うことは、学生の能力保持を保証したり、さらなる学習や練習の必要性を明らかにすることができるという点で重要なことである<sup>7)</sup>。加えて、教育内容・教育方法等を教員がフィードバックする上でも重要なことであろう。

#### 4. 成人看護学における看護技術教育

成人看護学における看護技術教育の教育内容・教育方法・教育成果について文献のレビューと分析により、以下のような視点で検討していくことが望まれる。

- 1) 看護学領域毎に看護技術教育を検討するのではなく、全領域で「何を・どこまで」習得して卒業させるのか、その保障する内容（卒業時の到達度）を検討していく必要がある。
- 2) 演習の構成は、看護過程（思考過程）を用いての思考演習と看護技術を実施する行動演習（実技演習）の習得を目指したものと、状況設定した紙上事例を用いての看護技術を実施する行動演習（実技演習）の習得を目指したものを併用していく必要がある。その際に大学の学習環境および実習施設環境を考慮し、卒業時の看護技術の到達目標を達成できるように両環境での学習が互いに補完・強化されるものにしていく必要がある。看護技術の習得は、体験学習が望ましく、かつ必要であると言われている<sup>8)</sup>。

しかし、その経験的学習は難しいものである事を認識し、効果的に習得できるように看護技術教育の教育内容・教育方法を検討し実施していく必要がある。

- 3) 看護技術教育の方法としての演習の検討をしていくに当たっては、教育の成果を明確にすることと同時に教育の評価方法を具体的に、教員と学生がともに技術を評価するよう留意する必要がある。

#### 5. 本学の成人看護学における今後の課題

本学部は、本学の建学の精神である「主・師・親」に基づき、看護に必要な専門的な知識・技術を身につけた実践力のある看護師・保健師の養成をめざしている。また、変革する社会に対応しうる人間性豊かな完成を兼ねそなえた人材を育成することを教育理念としている。この理念にある「看護に必要な専門的な知識・技術を身につけた実践力のある看護師・保健師」として学生が卒業するためには、次のようなことが考慮され、検討される必要がある。

一つは、本学における成人看護学の看護技術教育は、その学習環境として距離的に離れている実習施設を利用しており、かつその実習施設は設置主体の全く異なる施設であることなどの特殊性を考慮した上で検討がなされる必要がある。また、教育課程の特色として早期の臨地実習を取り入れていること、成人看護学の臨地実習が3年次春より実施することなどを考慮し検討する必要がある。そして、「いつ・どこで・なにを・どのように」看護技術教育を実践し、教員と学生がともに技術を評価し、卒業時の看護実践能力の到達目標と照らし合わせて、成人看護学領域のみでの検討ではなく、全看護学領域による検討を進めてゆくことが必要である。開設2年目であり、風通しの良い各看護学領域による連携・協働が実施できている本学部の特色を活かして、検討・実施可能と考える。

看護技術の到達目標を、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」<sup>9)</sup>に示された看護師教育の技術項目と卒業時の到達度を参考に、本学の卒業時の看護実践能力の到達目標を明確にし、教育してゆくことが重要である。そのときには、学習者である学生の自己評価を行うと同時に、教育者である教員による学生の習得状況の評価をおこなうことが大切である。また、教育方法・内容を検討する上で実習施設などの学習環境の特徴を考慮すると、成人看護学の看護技術教育にお

いては効果的であると考えられる学内学習環境（教材・シュミレーターなど）の活用が大きな意味を持つことが分かる。また、それは学内における看護技術教育にとどまらず、臨地実習での体験学習を効果的に活用するために、学内における実習前後の自己学習の組み合わせや学習環境の整備を行うことが大切である。

以上のように、本学成人看護学領域における看護技術教育の今後の課題が明確になったのを受け、今後看護技術教育の充実に向け、教育内容の精選・教育方法の工夫・学習環境の整備に取り組んでゆきたいと考える。

## 6. 本研究の限界と課題

本研究の限界は以下の二点である。

一つ目は、成人看護学の看護技術教育に関して報告されている研究論文を分析対象としているため、その範囲内で一般的傾向は把握することができる。しかし、それは実際に実施されている成人看護学の看護教育内容・方法の全体の一部であるため、一般化して述べることはできないということである。看護教育機関があるかぎり、成人看護学の看護技術教育は実施されているが、報告された研究論文を分析対象としたため、全体を概観することはできていない点である。

二つ目は、わが国の成人看護学における看護技術教育の傾向の把握を本研究の目的にしぼったため、海外の状況は不明であるということである。日本の現状のみならず、海外の成人看護学における看護技術教育の状況を把握し、本学部の検討をする際の資料にしておく必要がある。

## おわりに

本学部における成人看護学の看護技術教育の在り方を検討するため、わが国の成人看護学領域における看護技術教育の教育方法・内容とその成果について研究論文をレビューし分析を行った。その結果、成人看護学の視点からマクロにそしてミクロに検討する必要のある課題が示唆された。今後、得られた示唆を活用し、本学の成人看護学そして看護学科における看護技術教育の在り方を検討し、教育に反映させていきたい。

## 【引用文献】

- 1) 日本看護系大学協議会「看護系大学の学内演習・臨地実習に関する調査」報告書（2001）
- 2) 文部科学省看護学教育の在り方に関する検討会「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告（2004）
- 3) 日本看護系大学協議会「看護職の教育に関する声明」  
<http://janpu.umin.ac.jp/seimei.html>
- 4) 文部科学省大学短大における看護教育の充実に関する調査協力者会議「指定規則改正への対応を通して追及する大学・短期大学における看護学教育の発展」報告（2007）
- 5) 野村陽子・小池智子・山田里津・荒川真知子・遠藤敬子：視点 新しい看護基礎教育のカリキュラム看護展望, 28-49, 32 (6), 2007.
- 6) 江本愛子監訳：基礎から学ぶ看護課程と看護診断3, 医学書院, 3, 2000.
- 7) 舟島なおみ監訳：看護学教育における講義・演習・実習の評価, 医学書院, 4-5, 2001.
- 8) Benner Patricia：看護実践における臨床知の開発, 経験的学習とエキスパートネス, 日本赤十字看護大学紀要, 64-70, 60, 2006.
- 9) 厚生労働省看護基礎教育の充実に関する検討会「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書（2007）」



表4 対象文献一覧

文献番号	
1	山本捷子他；日本赤十字社看護基礎教育課程における災害看護教育の現状 設置主体の異なる4年制看護大学と比較して、日本赤十字看護学会誌、7 (1)、78-84 (2007)
2	村上礼子他；看護過程演習における指導方法の検討 思考過程の習得と自分たちで考えることができたという実感、自治医科大学看護学部紀要、4、5-16 (2007)
3	舟根妃都美他；成人看護学におけるディベート演習についての検討、名寄市立大学紀要、1、15-21 (2007)
4	盛永美保他；臨床看護技術に関する自己学習教材の開発とその評価、滋賀医科大学看護学ジャーナル、5 (1)、93-96 (2007)
5	井瀧千恵子他；看護学生における一次救命処置へのAED導入の試み 成人看護学演習のレポート分析から、弘前大学医学部保健学科紀要、6、23-29 (2007)
6	金子吉美他；成人看護演習における看護師と教員の技術評価の特徴、日本看護学会論文集:看護教育37号、383-385 (2007)
7	杉崎一美他；看護学生のストーマ演習前後のイメージ変化と学び 自作模擬ストーマモデルを導入して、日本看護学会論文集:看護教育37号、342-344 (2007)
8	和田由紀子他；クリティカルケアに対する看護学校の教育の現状と実習病院の期待、九州国立看護教育紀要、9 (1)、25-35 (2007)
9	浅井美千代他；慢性病患者の看護における教育方法の検討、千葉県立衛生短期大学紀要、24 (2)、17-24 (2006)
10	田中初江他；3年課程における卒業期の看護技術習得状況 成人看護学実習を終えて、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要3号、19-24 (2006)
11	田中初江他；基礎看護技術のマトリックスについて 各看護学との関連、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要3号、14-18 (2006)
12	沖野良枝他；急性期成人看護学演習において協同学習に基づく説明活動が学生に及ぼすストレスと効果、人間看護学研究4号、63-74 (2006)
13	米田照美他；急性期成人看護学演習における学生の協同学習および説明活動による学習効果 授業体験レポートの質的分析による考察、人間看護学研究3号、135-144 (2006)
14	佐々木秀美他；看護学生の自己効力感を高めるための授業の在り方に関する検討 成人看護学概論に学外演習を試みて、看護学統合研究、6 (2)、8-18 (2005)
15	木村千代子他；成人看護学技術教育の検討 成人看護学実習における技術実施率とヒヤリ・ハットの内容から、日本看護学会論文集:看護教育36号、251-253 (2005)
16	稲本ゆかり他；成人看護学実習における看護技術の経験状況からの検討 学生が身体への侵襲を伴う技術や診療の援助技術を臨地で学ぶための一考察、神奈川県立病院付属看護専門学校紀要10号、45-49 (2006)
17	菊地美香他；成人看護学急性期領域の実習における看護技術教育の検討(第2報) 実習前技術演習を取り入れたことによる変化、天使大学紀要、5、39-50 (2005)
18	作田裕美他；専任臨床実習指導者体制を活かした看護技術教育の試み 「看護技術行動形成表」を活用した指導と学習過程、看護教育、46 (12)、1114-1119 (2005)
19	門間正子他；成人看護学における「診療・処置に伴う看護技術演習」取り組みの効果 演習後の学生の感想を分析して、日本看護学会論文集:看護教育35号、214-216 (2005)
20	豊島由樹子他；紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第3報) 関連図を取り入れた演習における学生の自己評価の変化、聖隷クリストファー大学看護学部紀要13号、81-90 (2005)
21	上田稚代子他；成人看護学(周手術期)におけるストマケアのロールプレイに関する学習効果、和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要、7、49-56 (2004)
22	上田稚代子；成人看護学(周手術期)におけるストマケアのロールプレイに関する学習効果、和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要、7、49-56 (2004)
23	猿田貴美子他；学校評価への取り組みと改善へのアプローチ 学生への授業評価アンケートを実施して、神奈川県立病院付属看護専門学校紀要9号、8-16 (2005)
24	村田日出子他；看護実践につながる看護技術教育の取り組み 成人看護学実習における看護技術の習得状況と学内における技術教育との比較、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要2号、18-26 (2005)
25	田中初江他；模擬患者参加型の看護過程教育の実際 より実践に即したイメージしやすい教育効果を目指して、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要2号、1-11 (2005)
26	中村織恵他；観察・援助技術の向上を目指した教育方法の検討 事例に対する看護場面を設定した演習を通して、埼玉県立大学短期大学部紀要6号、97-105 (2004)

- 27 菊地美香他；成人看護学急性期領域の実習における看護技術教育の検討 学生が経験した看護技術の内容から、天使大学紀要、4、53-67 (2004)
- 28 津田新菜；成人看護学演習の教授方法を考える 演習後のアンケート結果より、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要1号、13-18 (2004)
- 29 小田和美他；紙上患者の事例を活用した看護過程演習における教育上の課題(第1報) 関連図への教員のコメント内容の分析を通して、岐阜県立看護大学紀要、4 (1)、105-111 (2004)
- 30 萱嶋美子他；成人看護学技術演習における演習計画書の検討 患者への安全配慮義務をどのように学ばせるか、神奈川県立病院付属看護専門学校紀要8号、24-30 (2004)
- 31 齋藤君枝他；「使える技術」を目指した糖尿病自己管理技術演習の教育評価 成人・老年看護学ケア演習を通して、新潟大学医学部保健学科紀要、7 (5)、621-626 (2003)
- 32 上野公子他；学生の困難さに焦点を当てた「看護過程」の演習評価 脳卒中慢性期の事例を用いて、新潟大学医学部保健学科紀要、7 (5)、611-620 (2003)
- 33 奥津文字他；精神運動領域のまなび方と共感性との関連 成人看護学急性期の技術演習状況とプロセスレコードの分析より、健康人間学16号、50-55 (2004)
- 34 赤澤千春他；精神・運動領域の学び方の分析 成人看護学急性期の技術演習より、健康人間学16号、45-49 (2004)
- 35 遠藤恵子他；山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向(第1報) 卒業生の実態と看護技術演習に対する評価、山形保健医療研究、7、49-56 (2004)
- 36 過能清美他；急性期実習「生命の危機的状態にある患者の看護」の現状と評価 学生アンケート調査より、九州厚生年金看護専門学校紀要4号、43-62 (2003)
- 37 武藤眞佐子他；リフレクティブシンキングとグループ学習を用いた統合学習効果 成人看護学臨地実習後に連動する学内演習、看護総合科学研究会誌、6 (1)、3-11 (2003)
- 38 堂園道子他；成人看護学における事例演習の授業評価、東京厚生年金看護専門学校紀要、5 (1)、6-9 (2003)
- 39 澤田和美他；紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第2報) 実技演習との関係からみた看護計画記録の分析、聖隷クリストファー大学看護学部紀要11号、139-144 (2003)
- 40 豊島由樹子他；紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第1報) 看護過程演習前後における学生の自己評価、聖隷クリストファー大学看護学部紀要11号、127-138 (2003)
- 41 柴崎いづみ；成人看護演習における自己指向学習に対する学生の自己評価 2年間の調査結果から、日本看護学会論文集：看護教育33号、99-101 (2002)
- 42 青木菫子他；看護技術教育における既習学習をふまえた主体的グループ学習の試み、新潟大学医学部保健学科紀要、7 (4)、451-457 (2002)
- 43 鈴木玲子他；成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討 SPを取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開、看護展望、28 (3)、46-52 (2003)
- 44 関美奈子他；成人看護学における臨地実習前演習の学習効果の検討、和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要、5、45-54 (2002)
- 45 石川りみ子他；成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果、沖縄県立看護大学紀要3号、85-93 (2002)
- 46 村上千鶴他；成人看護学における学内演習の実習への効果の検討、和歌山県立医科大学看護短期大学部紀、4、47-55 (2001)
- 47 小濱優子他；病態生理学・成人看護論I・成人看護論IIの連結講義 糖尿病事例による演習を試みて、川崎市立看護短期大学紀要、7 (1)、67-70 (2002)
- 48 武藤眞佐子他；看護実践と思考の過程の向上を目指す看護学演習 成人期を対象とする看護実践の記述方法にSOAP (I) SOAを用いて、北海道大学医療技術短期大学部紀要14号、37-49 (2001)
- 49 黒田裕子他；看護基礎教育カリキュラムへの看護診断の取り入れに関する調査、看護診断、6 (1)、112-119 (2001)
- 50 齊藤静代他；成人臨床看護論学内演習の教育効果 術後合併症予防の術前指導演習実施後のレポートより、香川県立医療短期大学紀要、2、47-55 (2001)
- 51 淘江七海子他；基礎看護技術教育におけるCAI教材の開発 感染予防、香川県立医療短期大学紀要1、25-30 (2000)
- 52 坂田直美他；成熟期看護学概論学外演習で学生が学んだ看護活動の課題とその取り組み、岐阜県立看護大学紀要、1 (1)、111-119 (2001)
- 53 坂田直美他；成熟期看護学概論学外演習で学生が学んだ看護活動について、岐阜県立看護大学紀要、1 (1)、103-110 (2001)